末黒野

すぐろの

3月号（通巻811号）

末黒野　平成二十六年三月五日発行　第六十九巻第三号（通巻八一一号）

夕しぐれ

小川玉泉

栗鼠跳べり黄葉盛りの大銀杏

枯れ切つて人影あらず芒原

電飾の点滅忙し枯けやき

花八手けふ何事もなく暮れぬ

山茶花の縋る日差の生まれけり

さざんかの樹下雉鳩の日浴びをり

柚子二果に目鼻描きぬ冬至風呂

冬日和畦より仰ぐ白き富士

夕しぐれ止みぬ紅蓮の雲の縁

参道の木々の枯れ様朱の鳥居

年新た門扉に飾りなきわが家

中洲発ち初日へ向ふゆりかもめ

枯一途

松本三千夫

近道は寺の境内冬夕焼
庭下駄の白き鼻緒や寺小春
枯蓮の黙考するや影沈思
犬駈けて芝のグランド露万朶
交番の小さき机や冬灯
自衛艦艦旗降納冬夕焼
冬灯白き便箋鳩居堂
躓くや走り根に寒詰まりをり
灯台へひと筋の道枯一途
冬の鵙山は谺をよく返し
石祠の幣の千切れて枯野道

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

冬菜

松田泰子

神の森すこし騒ぎて黄落す
さびしさの深さ落葉の深さかな
まだ土の匂ふ冬菜をもらひけり
枯園の何にさはりし手の匂ひ
冬木立歩きて次の冬木立
一灯が点りそれきり峡の冬
絨毯を替へて家また古くなる
笹鳴の次のこゑ待つあゆみかな
着ぶくれて青信号に後れとる
仏にも立つと坐ると石蕗の花

冬に入る

安斎久英

淡々と沖に虹立つ冬はじめ
上弦に侍る夕星冬に入る
懸大根そびらけだるき波の音
無灯火の自転車落葉蹴散らして
時雨来と出店そそくさ畳まるる
水仙や活断層の丘に沿ひ
電飾のがんじがらめや枯大樹
畳替へてその夜の眠り浅からず
丹沢湖藍を深めて冬ざるる
一斉に拳開きぬ浜焚火

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

冬晴　岡野里子

火祭や煙焔われに押し寄せて
冬天へ護摩の白煙火の柱
綿虫や多羅葉に書く雪一字
日面の笑ひ羅漢や冬紅葉
静もれる水面池塘の冬木賊
冬晴や風にさ走る池の綺羅
鏡なす池日溜りの冬桜

冬深む　小倉正穂

土牢のひたすら冥し照紅葉
ゆく秋の色さまざまの草もみぢ
冬によく似合ふ屋台の灯影かな
余生とはこんなものかも日向ぼこ
艀より淡き洩れ灯や月寒し
一団や深眠る山起すかに
風音か木々の寝息か冬深む

冬の蝶

加藤静江

日だまりの冬蝶の黄の淡きかな
碧空や橡の冬芽の確かなる
石蕗の黄のいよよ鮮やか小祥忌
火渡りの檜葉の香や冬うらら
天空を射てお火焚の清めの矢
火渡りを待つ行列や足凍てて
林泉や枝垂るる梅の鋭き冬芽

お火焚

菅野日出子

櫨紅葉の色をすき込む流れかな
境内に開く昼餉や神の留守
袴着の児に降りそそぐ初時雨
冬天や窓拭く人の命綱
幕間の楽屋見舞ひや室の花
お火焚を煽る読経や護摩木投ぐ
結界の落葉しぐれや散華めき

雪

菅野蒔子

雁の群塒へかへる羽音過ぐ
電話ベル一度で切れぬ夜の寒し
雪降り来たちまち白く変身す
雪掻くと遺影の夫に告げて立つ
日ざしきて老松昨夜の雪こぼす
欠席の口実さがす師走かな
年用意仕来り伝へよとラジオ

秋惜しむ

堺昌子

山々の紅葉の及び谿静か
吊橋の向かうも紅葉濃かりけり
しろたへの滝真向ひに秋惜しむ
段畑の風にあらがひ秋桜
里山に適ふ水車や冬の晴
手をひろげ母追ふ児の目冬夕焼
灯台や北風の碧さを鳶の舞

青炎集

小川玉泉選

横浜　前川美智子

遠近の鶴とよもせり夕茜
曇天に日矢一筋や鶴舞へり
冬ざれや田の面を漁る夕鴉
門前に鯉飼ふ町や朝時雨
しぐるるや庇の深き武家屋敷
冬晴や裾長々と薩摩富士

横浜　田村加代

茶の花や子等と夫の三回忌
住み古りて庭の万両湧くがごと
葉牡丹の紅白庭の華やげり
庭からの客に伐りけり実千両
帰り花見せたき若き写真出づ
文旦に故郷しのぶ倉の前

横浜　鍋島武彦

半僧坊へ落葉時雨の磴登り
山里や日の柔らかき冬菜畑
大根引きほら持ってけと投げ呉れぬ
真向ひは房総の嶺々懸大根
日を撥ねて綾に散り交ふもみぢかな
実りなき原発論議炭をつぐ

横浜　大内由紀

雨上がり知らする鳥語枇杷の花
山茶花や思ひあぐぬる夜のメニュー
馬車道を画く休日落葉舞ふ
こととことと煮込むシチューや虎落笛
目をこらし探す星座や懐手
切岸の岩肌洗ひ冬怒濤

横浜　上月智子

凩や枝の鳥網の取り切れず
蝋石もて描かれし線路日短
日溜りへ筵を移し干し蕪
宴会の続く夫や菜雑炊
新巻や一点睨む面構へ
捨て難き人形の熊十二月

千葉　岡井マスミ

避難所に近く紅葉の鎮守さま
小春日や路地に理髪の店開き
時頼の遠忌に適ふ小春空
短日やつひに一人の路線バス
背伸びして見やう見真似の大根干し
冬晴るる苑や真中に義民塚

横浜　岡本ヨシエ

急勾配の里の茶畑花まばら
分校生色とりどりのちやんちやんこ
碧天や木の葉しぐれの峠道
山茶花の道の尽きたり渡し船（油壺マリンパーク三句）
下顎をピアノにアシカ聖歌弾く
川獺の手に触るる子や冬うらら

横浜　小倉純

渓紅葉明治を今に眼鏡橋
ゆふづつと並ぶ弦月冬帽子
茶の花や昔庄屋の垣根跡
杉の実の早も熟れそむ小六月
受講終へ己が影踏む小春空
朝に掃き夕べに積る落葉かな

横浜　榊山智恵

露坐仏の台座に手向け白桔梗
丸窓にぴつたり寺の冬紅葉
本堂を夕影走り冬桜
灯されて闇に泛びぬ冬紅葉
登校の駆け行く子等や今朝の冬
木の葉散る音のやさしき時の鐘

横浜　神谷さうび

碑へまつすぐに差す冬日かな
新しき銀杏落葉へ朝日影
尼寺の静けき庭や夕笹子
坂多き函館の街枯葉舞ふ
冬夕焼そびらに路面電車来る
朝市の鰤の切身の厚さかな

耕土集

落葉松の散りてもかをり残りをり　横浜　布施由岐子

霜晴や塵も芥も煌めきて

ひとひらをノートにはさむ散紅葉

冬蜂の惑ふ都会の交叉点

小春日や涙腺ゆるむ江戸噺

持ち重りする極月の小買物　土屋　実郎

年の瀬や老の手習ひ限もなく

花八つ手花序に朝日のまぎれこみ

囲炉裏端祖父の胡坐が末子の座

年の瀬や松前漬は母の味

赤城の泥纏ひて届く葱の束　山本　茂子

一輪の百花にまさる返り花

さまざまな悔い押し寄する師走かな

夕闇を小走りに行く年用意

湯船より柚子とり出して仕舞風呂

松本三千夫選

鏡池逆さ紅葉の水燃ゆる（桂離宮にて）

曽我の碑の堂々たるや野菊咲く

葱刻む無骨な夫の厨かな

風落ちていろは紅葉の散り惑ふ

直箸の寄せ鍋囲む親睦会

鱇崎　洋一

鰯雲人それぞれに荷を背負ひ

からすうり風に揺れ合ひ日本晴

夕照や散継ぐ落葉堆く

冬の空農夫小さく見えにけり

姫椿彩り競ふ冬の朝

清水　元子

雲脱ぎて月輝けり湯葉の宿

添削の一句生きいき小春風

冬麗や時に牙むく芙蓉峰

柚子の湯に首まで煩悩沈めけり

山襞を彩どる高尾冴えわたり

吉田美智子